

(1) 忠犬ハチ公の物語の概要

1924 年、東京帝国大学に勤めていた上野英三郎氏は念願であった秋田犬を購入した。ハチは上野教授が出かけたり、帰ってきたりする際には必ず玄関先まで迎えに行き、渋谷駅まで送り迎えしに行くこともあったと言われている。しかし、ハチが上野教授に飼われ始めた翌年、上野教授は急死した。ハチはその後も帰らぬ上野教授を迎えに約 9 年間渋谷駅に通い続けた。この話が新聞の一面に取り上げられてから忠犬ハチ公としてハチは有名になり、現在でも人々に親しまれ、渋谷を始め、各地にハチ公もしくはその飼い主である上野教授とともに像が建てられている。東京大学弥生キャンパスに建造されたハチ公と上の教授の像もそのひとつである。

(参考 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BF%A0%E7%8A%AC%E3%83%8F%E3%83%81%E5%85%AC>)

(2) ハチ公は本当に上野教授を迎えに行っていたのか

帰らぬ主人を待ち続けた忠犬として多くの人に親しまれているハチ公だが、授業内で先生が言及されていたように、ハチ公は渋谷に焼き鳥をもらいに行っていただけで渋谷駅に通っていた目的は上野教授を待つ、というわけではなかったのでは、という疑問がある。たしかに、ハチ公の解剖結果には焼き鳥の串が数本でてきた、というものがあり、死ぬ前まで焼き鳥を食べていたことは間違いないようである。しかし、焼き鳥を食べに来ていたとすると少しつじつまが合わなくなる部分もある。

ハチのことを新聞に投書した斉藤氏の述懐より抜粋されたものを見ると、

「(ハチは) 困ることにはおとなしいものだから、良い首輪や新しい胴輪をさせると直ぐ人間に盗みとられる。(中略) また駅の小荷物室に入り込んで駅員にひっぱたかれたり、顔に墨くろぐろといたずら書きされたり、またある時は駅員の室からハチが墨で眼鏡を書かれ八の字髯をつけられて悠々と出て来たのに対面し、私も失笑したことを覚えている。夜になると露店の親父に客の邪魔と追われたり、まるで喪家の犬のあわれな感じであった」

「なんとかハチの悲しい事情を人々に知らせてもっといたわって貰いたいものと考え、朝日新聞に寄稿したところ、その記事が大きく取り扱われ、昭和七年十月四日付朝刊に『いとしい老犬物語、今は世になき主人の帰りを待ちかねる七年間』という見出しにハチの写真入りで報道され、一躍有名になってしまった。(中略) 朝日の写真班員の来駅で駅長がびっくりしてしまい、東横線駅ともども駅員や売店の人々まで急にみな可愛がるようになってしまった」

(斎藤弘吉 『日本の犬と狼』 雪華社)

とあり、焼き鳥屋の人や駅員にいじめられていたハチは新聞に載って有名になる前、死ぬ直前のようにかわいがられ食べ物を与えられていたとは考えにくい。また、ハチ公は毎日2回朝と夕に渋谷駅に通っていたとされるが、朝の時間ではまだ焼き鳥屋は営業しておらず、ただ焼き鳥を食べに行っていただけと結論づけるのは難しいかもしれない。

(3) 自分が思ったこと

今回少しハチ公と上野教授について調べましたが、少し調べただけでは真実がどうであったかは判断できそうにありませんでした。今のところ、忠犬ハチ公の物語は美化されすぎているような気もしますが、ハチ公に上野教授を迎えに行くつもりはまったくなかったとも言い切れないような気もします。個人的に犬を飼った経験から、犬は人間が考え付かないようなことができないことをと思っています。昔、愛媛県の西条市に住んでいたとき、車で1時間弱かかる今治市まで出かけたとき、当時飼っていた雑種の犬が行方不明になってしまったことがありました。見つからないまま諦めて帰ってしまったのですが、その二ヶ月後憔悴した状態でしたが、自力で家まで帰ってきました。車で連れて行っているし、だいぶ離れているのに、と信じられませんでした。実際そういうことが起こったので何かわからないけど犬はすごい、と思っています。また時間があればハチ公についてももう少し詳しく調べたいと思います。